

# 新美南吉の詩集より

Nankichi×Step

南吉の詩は童話に勝るとも劣らず魅力的。  
地元を中心に活躍する現代の若手作家たちと詩をコラボレーションしていきます。



## 金魚

或る晩君は君の小さい世界が

さかさまに見えるのでびっくりする

つまり君は仰向きに浮いたのだ

こいつは少々具合がわるいと君は思う

全くそうなのさ

君の配偶者が見舞いに来る

どうしたんだどうしたんだと君の体に

触って見る

そのうち君の配偶者は君の尾の先が

美味しいことを発見する

何しろ長い間何も喰べなかった

彼はすまないと思いつながら

君の尾ひれをむしってしまう

夜があける

僕が起きて君の住いをのぞいてみると

君はすっかり楽になっている

君はもう走りまわる必要もない

えらさえ動かす必要がない

僕が石鹸箱のふたで君をすくいあげると

君はもうすっかり葬いの用意も出来ている

尾ひれもなしだから

もうお鬚剃りはいらぬのだ

こうして君は麻雀の駒のような形で

どぶの中へほうり込まれる

足立 真人

イラストレーター  
<http://masatoa.com>

2002年初個展、以降毎年個展などで作品を発表。現在フリーイラストレーターとして活動中。また2008年より、『Dutch a』としてオリジナル布雑貨を展開。

絵について

「金魚」は憐れ命の詩ではありませんが、その憐れからこそ金魚の美しさを描いてみました。

## 新美南吉



にいみなんきち  
(1913-1943)

大正2年7月30日、愛知県知多郡半田町(現・半田市)に生まれる。幼くして母を亡くし、養子に出されるなど寂しい子ども時代を送る。旧制半田中学校卒業後、「赤い鳥」入選を契機に北原白秋や巽聖歌の知遇を得る。昭和18年、結核のため29才で世を去る。

## 解説

南吉の詩としては、少し非情な作品と思われるかもしれない。だが、この非情な結末に辿り着くまでの細部を丹念に見てみると、なかなかユーモラスな作品であるのがわかる。まず、金魚の配偶者である彼が見舞いにくる。彼はけっこう心配しているのだ。ところが、そのうち尾の先が美味しいことを発見し、すまな

いと思いつながらもそれを食べてしまう。走り回ることも、えらを動かすことも必要のなくなった金魚は、すっかり楽になっている。葬いの用意も出来、お髭そりもいらなくなっている、というのだ。内容は非情なものだが、使われている言葉と表現は、何ともいえないおかしさとペース(哀愁)に満ちている。

## 解説者

前新美南吉記念館館長

矢口 栄 さん

半田市、知多市、東浦町の小学校勤務を経て'04年から'11年まで新美南吉記念館館長を務める。著書「南吉の詩が語る世界」(一粒社出版部)「子どもたちに贈りたい詩」(教育出版センター)「新しい詩の創作指導」(共著・明治図書)ほか。